

恋
其之式

岸
田
理
生

■登場人物

女一（はる）
女二（なつ）
女三（あき）
女四（ふゆ）
女五（あるこ）
女六（雪）
女七（月）
女八（花）
ないこ

男一（ハルヲ）
男二（ナツヲ）
男三（アキヲ）
男四（フユヲ）
あきを
戸籍係一
二
脱走兵
特攻帰り

プロローグ

仮にへせ・ん・そ・うと名づける出来事があった、それが終わったばかりの東京下町、洲崎長屋。

夕焼けの中、附近の川っぷちで八人の女たちが髪を洗っている。上半身双脱ぎの女もいれば、右半身だけ着物をすべりおろしている女もいる。

残照が女たちの乳房にまわりつく。

髪を洗いながらの私語が小波のようにひそひそと拡がる。

女一 帰ってきたそうよ。

女二 誰が？

女三 角の乾物屋の、

女四 ああ、息子。

女五 ええ、総領息子。

女六 そうかしら？

女七 えっ、何が？

女八 本当にあれで、

女一 帰ってきたのかしら？
女二 なぜ？
女三 だって手なしで、
女四 足なしじゃなかった？
女五 手なし足なしよ。
女六 眼もなくて、
女七 鼻もなくて、
女八 口もなくて、
女一 だったら、何があったの？
女二 頭は大部分あったわね。
女三 それから首、
女四 それから胴体。
女五 それだけかしらね。
女六 そのくらいだわ。
女七 それでほんとに、
女八 帰ってきたのかしら？
女一 帰ってくるのかしら？

女二 誰が？
女三 出て行った男よ。
女四 ああ、あんたの、
女五 ええ、わたしの、
女六 五体満足が、
女七 帰ってくるのかしら？
女八 手あり。
女一 足あり。
女二 眼、鼻、口。
女三 首があって胴体のある。
女四 五体満足が帰ってくるのかしら？
女五 それであんたは、
女六 えっ、何が？
女七 帰ってきて欲しいのかしら？
女八 待ってるのかしら？
女一 えっ、何を？
女二 あんたの乳が、

女三 ギュツとつかまえられて、
女四 乳の中で男たちの留守が、
女五 もみくちやにされて、
女六 消えるのを、
女七 待っているのかしら？
女八 ええ、わたしたちの乳が、
女たち 待っているのかしら？

女たち、ふっと吐息し、乳房をかかえこむ。まじないのように、

女たち 乳 わたしたちの乳

大きい 小さい

丸い とがった しばんだ ふくらんだ へしゃげた

乳 わたしたちの乳

女一 子を産まなかった乳

女二 子を産もうとしなかった乳

女三 子が産まれなかった乳

女四 子を産んだ乳
 女五 産んだけれども間引いた乳
 女六 産まれたけれども子捨ての乳
 女たち 春 夏 秋 冬 わたしたちの乳
 こよみの乳 わたしたちの乳
 女七 子を産んで吸わせた乳
 女八 子が噛んだ乳 子に噛まれた乳
 女一 子に食われた乳 子が食った乳
 女たち 子が食った乳 わたしたちの乳
 女一 母には乳房がなかったわ 切りとられていたわ
 女二 なぜと私 きいたわ
 女三 おまえがね と母はいったわ
 女四 おまえがね 喰っちまったんだよ
 女五 だから私 思ったわ
 女六 子供を持つと 乳がなくなる
 女七 赤ん坊が 食べてしまう
 女八 赤児は乳を 食べるんだわ

女一 歯のない口で 食べるんだわ

女たち おしゃおしゃばりばり 喰うんだわ

乳 わたしの乳 わたしたちの乳

女二 子供は嫌い だわ

女三 乳房喪失 したくないわ

女たち 乳 わたしたちの乳

甘い乳 苦い乳

甘くて苦い乳 苦くて甘い乳

乳の中の血 わたしたち容れもの

女たち、黙る。身支度をする。

と、女二がアッ！ と叫ぶ。

女一 何なの？

女三 帰ってきたわ。あんたの……。

女一 わたしの……？

ふりかえると、夕焼けの中に一人の男一が立っている。女一はそのときから「はる」と名づけられる。

はる あんた。

ハルヲ ただいま。

男一は、はるの夫のハルヲである。

はる お帰りなさい。

はるとハルヲを残して女たちは去ってゆく。

― さくらさくら

はるは茶袱台を運んでくる。と、ハルヲは「腹が減った」と訴える。

はる えっ？

ハルヲ メシだ。

はる ええ……。

釜と茶碗と箸を運んでくる。と、ハルヲは夢中で喰い、こぼれたメシ粒は手で拾ってく
う。はる、茶袱台を意味もなく拭きつづける。

ハルヲ おかわり。

はる はい……。

ハルヲは、また喰い、はるは、また拭く。

ハルヲ おかわり。

はる はい……。

ハルヲは、また喰い、はるは、また拭く。

ハルヲ おかわり。

はる ……もう、ありません。あんたがね、今日帰ってきたら食べてもらおうと思って、ようやくこれだけ、手に入れたんですから。

ハルヲ 今日帰ってくると、わかっていたのかね。

はる いいえ。

ハルヲ だったらなぜ、米のまま取っておかなかったんだ？ 明日帰ったんならヒヤメシだが、来週帰ったりしたら、おまえ、この暑さだ。腐るだろうが？ 実にもったいない。

はる 今日の分はきのう手に入れて、明日の分は今日手に入れて、そうやって毎日少しずつ、どうにかこうにかやってきたんだわ。

ハルヲ だからといって、毎日少しずつ食っちゃうことはないだろう。

はる だって、あんたは今日帰ってきたでしょう。それに私だって、食べなきゃ死にますから。死んだらあんたのメシ、作れませんから。

ハルヲ ……満腹したよ。

はる ……（意味もなく笑う）

ハルヲ このあと、どうしよう。

はる ……（笑いつづける）

ハルヲ 自分の家だ。

はる ええ。

ハルヲ 自分の部屋だ。

はる ええ。

ハルヲ 自分の家で自分の部屋だから、寝てしまおう。

ゴロリと横になる。眠る。

はる 寝るんですか。そうですか。私、あんたが帰ってきたら、花見の話なぞしようと思っ
たのにね。そうですか。そうやって一人で軒ですか。あんた、忘れたんでしょね。大昔の
できごとみたいに、すっかり忘れてしまったんでしょね、さくら。

はる、うっとりとして笑む。

はる さくら、でした。

こんなに桜で、あきるほど桜で、朝から晩まで桜でした。私、怖くなったんです。こんなふうに、あきるほど、あたり一面さくらさくらじゃ、来年の桜、見られないかも知れないわ。桜の見納めなんじゃないかと怯えたんです。あたし、絵日傘さして、あんた、下駄はいて、それが景色によく似合っただけの花見、だったんです。

ハルヲ、むくりと体を起こす。

ハルヲ 俺が何だって？

はる 下駄ですよ。朴歯の重い大きい、下駄。

ハルヲ おまえが何だって？

はる 絵日傘ですよ。くるくる絵日傘カラカラ下駄。

ハルヲ ……おまえ。

はる 何です？

ハルヲ 忘れたのかね？

はる 忘れたのは、あんただわ。

ハルヲ 私はおまえと、

はる ええ、花見。

ハルヲ 花見になぞ行ったことはないよ。

はる えっ？

ハルヲ わたしは、おまえと、花見なぞ、行ったことが、ない。

はる ……

ハルヲ 月見には行ったよ。川に舟を浮かべて月見がしたいとおまえがいうから、川に舟を出して月見で、ところがおまえが、月が出た出たと浮かれるものだから、舟が引っくりこけて…、

はる ……

ハルヲ ……それから雪見だ。田んぼの真ん中で、くそ寒いのに雪見で、ところがおまえが、雪やこんこんと浮かれるものだから、肥溜めに引っくりこけて…、

はる ……

ハルヲ ……だが、花見はしてないよ。

はる ……

ハルヲ 誰と花見だね。誰が下駄で、カラカラだね。

不意に二人の背後の戸が開く。

男が立っている。

ハルヲ　それで？

はる　押入れです。

ハルヲ　押入れて花見というわけだ。

はる　脱走兵です。

ハルヲ　私は二等兵だよ。

はる　いのちを張って、脱走したんです。

ハルヲ　いのちカラガラ帰ってきたよ。

ハルヲ、煙草を出し、灰皿を探す。

と、脱走兵が灰皿を持ってくる。

ハルヲ　トンプクはないかね。頭痛だよ、私は。

脱走兵、薬袋を持ってくる。

ハルヲ、釈然としない顔つきで薬を飲み、それから立ち上がって探しものをする。

脱走兵 何です？

ハルヲ シャボンに手拭いだ。

脱走兵、シャボンに手拭いを持ってくる。

ハルヲ 風呂へ行ってくるよ。

脱走兵 松の湯はツブレましたよ。

ハルヲ 東京中に銭湯はいくらでもある。

脱走兵 竹の湯、梅の湯、富士の湯、洲崎湯、全部つぶれました。

ハルヲ だったら、私はどこへ行けばいいのかね？

脱走兵 私が案内しますよ。ついてきてください。

二人、出て行き、はるは茶袱台を片づける。と、入れ代わりに、女二（なつ）が出てくる。

2 花火

川の音がする。

その岸に男二と女二（なつ）が三メートルほどの間隔を置いて座る。

男二　きれいさっぱりという奴だ。

きれいさっぱり焼け跡で、きれいさっぱり行方不明だ。おまけに町内会まるごとききれいさっぱりで、誰も彼も他人さまばかり。俺の顔を見て、どなたさま、と訊く。で、俺が名乗ると、知りませんね、だ。いったい、俺は、どなたさま、なんだ？

男二は独りごとを言いながら、じりじりとなつに近づいてゆく。なつもまた、見ず知らずの顔でじりじりと近寄ってゆく。

なつ　馬鹿馬鹿しいんだわ。まるっきり、馬鹿げているみたいなんだわ。一銭五厘の赤紙で持って行かれて、一銭五厘の戦死のお知らせ、だもの。馬鹿馬鹿しいったら、ありやあしない。あの人はいつだって茶袱台の向こうから、オイ、と呼びかけてきて、そのおかげで私、いつの間にか、私はオイって名前なんだと思ひ込んでいたのに、あの人がいないんじゃ、自分が

いったい誰なんだか、わからなくなってしまうわ。

男二となつ、顔を見合わせて、またすぐそらせる。そのままじりじりと近寄って体が触れ合う。

黙っている。黙っていて不意に、

なつ お帰りなさい。

男二 ……ただいま。

なつ お帰りなさい。

男二 ただいま。

なつ お帰りなさいでいいんですね。

男二 ただいまでいいんだね。

なつ (教科書を読むように) お帰りなさい、ナツヲさん。私はなつです。

男二 何というか。

なつ えっ？

男二 時代の変わり目には、時として得体の知れない状態になるものだ、そんなふうなことをね、
誰かがいっていたような気がする。

なつ 得体は知れています。

男二 えっ？

なつ 夫婦なんです。

男二 そうだな。

なつ そうなんです。

男二 そうだ。

なつ あんたはナツヲで、私の夫で、帰ってきたんだわ。

男二 そういうことだ。

なつ お帰りなさい、あんた。

男二 ただいま、おまえ。

男二は、ナツヲであることを引き受ける。

なつ いいんですね。

ナツヲ いい。

なつ では、せつぷんをしてください。

ナツヲ せつぷん、かね。

なつ はい。

ナツヲ 今すぐかね？　ここでかね？

なつ はい。

ナツヲ 何というか……。

なつ えっ？

ナツヲ 実に自信ありげな顔だ。疑わない眼でもあるし、信じ込んでいる鼻だ。

なつ ロです。

ナツヲ えっ？

なつ せっぷんは口です。

なつ、顔を近づけ、仰向く。

ナツヲ、あたりを見まわし、素早く接吻して知らん顔をする。

なつ あんた、だわ。

ナツヲ 俺だ。

なつ あんたは、いつだってせっぷんをかすめ取って知らんふりのあんだったわ。覚えてる？
ナツヲ 覚えているとも。

なつ 花火だったわ。

ナツヲ 花火だったよ。

なつ ソラ

ナツヲ ソラだ。

なつ 夜空。

ナツヲ 夜空だ。

なつ、うながすようにナツヲを見る。

なつ それから？

ナツヲ 花火だ。

なつ それから？

ナツヲ ソラだ。

なつ それから？

ナツヲ 夜空だ。

なつ 花火でソラで夜空よ。それから？

ナツヲ ……

なつ それから？

ナツヲ ……

なつ やっぱり、あんただわ。

ナツヲ 俺だ。

なつ 花火に夢中の私がいて、私に夢中のあんたがいて、空に真っ赤な打上げ花火。花が咲いて、

ふっと静かですれから、

ナツヲ ドカーンだ。

なつ ドカーンのその隙に、あんた、せっぷんだったわ。

ナツヲ 俺は何度も花火を見たよ。大概は昼花火という奴でね、バリバリッとくる時もあつたし、

ポンポンと気の抜けた花火の時もあつた。

なつ きれい、でしたか？

ナツヲ ともかく火の花だった。それは事実だ。花火だと俺は思ったよ。花火だ花火だ、田舎の

祭だ。それから俺は、

なつ それからあんたは？

ナツヲ そうだな、俺はおまえのことを思い出したよ。

なつ せっぷん？

ナツヲ そうだ、な。

なつ ソラ？

ナツヲ そうだな。

なつ 夜空？

ナツヲ そうだ。

二人、黙る。

黙ってそれぞれのことを考えている。

なつ どうします？

ナツヲ えっ？

二人、また黙る。

ナツヲ どうするね。

なつ ええ……。

二人、また黙る。それから、

なつ ……お帰りなさい。
ナツヲ ……ただいま。

二人、立ち上がると去ってゆく。

3 今は世の中

洲崎長屋の夜。

三人揃って赤い服に赤い靴、赤いスカーフに赤い口紅の、雪、月、花がそれぞれの鏡台で化粧に余念がない。

その前にゴロリと寝そべっている特攻帰り。

雪 どうかしら？

月 きれいよ。どうかしら？

花 きれいだわ。どうかしら？

雪 きれいです。

三人 どうかしら？

特攻帰り、おくりと身を起こし、熱心に、「きれいだよ」とほめる。

雪 (嬉し気に) きれいなんだわ。

月 (満足気に) きれいなよ。

花 (得意気に) きれいですって。

特攻帰り おまえたちを見ているとね。

三人 何？

特攻帰り 私は、嬉しくて満足気で得意だよ。それから何というか。

三人 何？

特攻帰り 生きるってことが人生だね。

三人 (鸚鵡返しに) そうよ。人生って生きることなのよ。

特攻帰り 実にそうで、まったくそうだ。行っておいで。

三人 行って参ります。

特攻帰り (突然) 万才! (叫んで万才をする)

雪 (嬉し気に) 万才なんだわ。

月 (満足気に) 万才なのよ。

花 (得意気に) 万才ですって。

笑いさざめき、出て行く。それと入れ違いに現れる、はる、なつ、あき、ふゆ。四人とも、箒を持っていて、長屋を掃きはじめる。

はる いいわね。

なつ まったくだわ。

あき あっという間に。

ふゆ 早変わり、ですものね。

はる カーキ色のごわごわが、一日で真っ赤っか。

なつ 私たちなぞ、赤いものといえは、せいぜいが赤チンで、

あき でなけりゃ白地に赤くの日の丸で、

ふゆ 年百年中、灰色だったのにね。

はる 一夜明ければ女子挺身隊員変じて、

なつ しょうふ、ですものね。それにまあ、

あき 特攻変じてヒ・モ、ですものね。

と不意に、特攻帰りが、「奥さん方」と呼びかける。

はる、なつ、あき、ふゆ、急に気ぜわしそうに地面を掃く。

特攻帰り ニンゲンというものはですよ。ヒトソレゾレに生き方がイロイロとあって、ですよ。

私はこれで実にこういう生き方においでいるんで、これはこれでいい生き方で、つまりヒ・

モ、でも、手段としてそれに徹底するのは、並の人間にはマネのできない才能で、ヒモであろうとなかろうと生き方としては、

ふゆ （言いつづけようとするのをさえぎり）つまりヒ・モなのでしょう

特攻帰り ヒモです。しかし、

はる （言いかけるのをさえぎり）ヒモなんだわ。

なつ ヒモですよ。

特攻帰り ヒモですがね、だが、

あき （言いかけるのをさえぎり）ヒモですものね。

特攻帰り 甲斐性のあるヒモですよ。私はロバのように丈夫だ。ヒーホヒーホ。何しろ三人相手

のロバのヒモですからね。ヒーホヒーホ。

はる まるで馬鹿に見えるわ。

特攻帰り 私はいつも馬鹿に見えてる。

なつ それはわかってます。でもあなた、他人の目にも本当に馬鹿に見えるようになったら気を

つけた方がいいわ。

特攻帰り そいつはお互いさまだ。私には時折、あなた方が時代遅れの馬鹿に見える。

あき で、あなたは時代すすみの馬鹿というわけね。

特攻帰り 猫の子も人の子も、子は子であって目は二つ、耳も二つで変わるところはないんです。

ふゆ でも私は、ミヤアと鳴きやあしません。ワンとも吠えないし、ヒヒーンともいななきやしません。

はる 迷惑をかけちゃあ、いないんだわ。

なつ ところがあんたは、どう？

あき 鳴くし吠えるしいなくし、長屋の恥で、夜ごと迷惑大会なんだわ。

特攻帰り そいつは誤解という奴だ。私は鳴かなくて吠えなくていななかなくて、まるで静かです。

ふゆ でも、聞こえますよ。うるさくって、しかたありやあしない。

はる いい加減にしないと、掃きだしますよ。

なつ そうでなかったって、あんたは、当然死んでなきやあならないはずの、特攻なのに、

あき 生きて帰って恥さらしなのに、恥ようともせず、ええ、恥も外聞もなく、ヒモなんですものね。

特攻帰り そのくらいでやめたらどうです。

あき 何が？

特攻帰り あれは、あんたの恥じゃないんですか？ ホラ、あそこだ。

女たち、つられて見ると、あきの夫のアキヲが亡霊のように立っている。

あき
あんだ……。

呟いて棒立ちのあきを残り、はる、なつ、ふゆ、は地面を掃きながら去り、特攻帰りは口笛で「リパブリック讃歌」を吹きながら去る。

4 枯葉の寢床

女三（あき）は、息子（あきを）と夕食の真っ最中。仲睦まじい。

あき （期待して）どう？

あきを 鯖だ。あんたの魚だ。あんたの名前はへあきで、魚の名前は鯖で、秋の魚だ。それから季節は夏だ。

あき 何と聞いたの？

あきを 鯖だ。

あき 煮ても焼いても、おいしいんだわ。メめても生でも結構よ。（期待して）どう？

あきを なかなかうまくメめてある。

あき 塩を贅沢に使うのよ。塩は雪のふりつもったように魚にあて、これで三十分。さっと水洗いして、も一度酢洗いして、生姜の皮と一緒に酢につけるのよ。

あきを 苦勞の味がします。

あき 相変わらぬのメ鯖だけど……。

あきを 僕には、うまい。

あき 嬉しいことをいうのね。

あきを それに……

あき 何？

あきを すぐに秋になります。

あき そうね。ええ、そうね。

あきを 月見だ。

あき そうだわ。

あきを 菊の花だ。「枕草子」です。

あき えっ？

あきを 「九月九日は、暁方より雨すこし降りて、菊の露もこちたく、覆いたる綿などもいたく

濡れ、うつしの香ももてはやされて」……どうしたんです？

あき ……私……何が何だかまるでわからないわ……仲間はずれにされたような気がするわ。

あきを 僕だって、きのう知ったばかりだ。

あき 誰から？

あきを 国語教師の……、

あき (言いかけるのをさえぎって) ああ、あのヒゲ。(と安心する)

あきを 山羊髭だ。

あき 九月九日がどうしたんですって？

あきを 菊綿ですよ。綿をね、

あき ええ、綿を？

あきを 綿を菊の花にかぶせて香を移し、その綿で身体をなでると寿命がのびる。

あき 知らなかったわ。あんたは毎日毎晩、物知りになってゆくのね。

あきを 物知りになったから、九月九日には菊の花を綿でくるんで、その綿で、

あき その綿で？

あきを あんたを撫でるつもりです。

あき くれるの？…綿で？…私を？

あきを ええ。

あき 私のどこを撫でてくれるの？

あきを どこもかしこも、です。

あき 手も？

あきを ええ、手の指も。

あき 足も？

あきを ええ、あしのうらも。

あき 背中も、

あきを ええ、背骨に沿って、ゆっくりと。

あき ……乳も？

あきを ええ、二つとも。

二人、ふっと黙る。食う。

と、男三が現れ、あきとあきをの食卓に近づく。あきの夫のアキヲである。

アキヲ ただいま。

あき (箸をとり落とす)

あきを (飯をかき込む。汁も魚も一緒くたに喰いまくる)

アキヲ ただいま。

あき お帰りなさい。

アキヲ (あきを見) 誰だね。

あきを (アキヲを無視して) ごちそうさまでした。(合掌する)

あき おそまつさまでした。

アキヲ (苛立って) 誰だと訊いているんだよ。……私は、帰ってきたんだ。それもただ帰って

きたんじゃない。いのちカラガラ、ようやく、辛じて、どうにか、だよ。やっとこさつとこ、
だよ。我が家にだよ。ここは我が家だろう？

あき 我が家だわ。

アキヲ 他人がまじった我が家かね。えっ？ まるで息子のような若い男を引っ張り込んで我が家とはね。

あきを お帰りなさい。

アキヲ 出て行きなさい。

あきを (あきに) いいんですか？ 出て行って？

あき 冗談じゃないわ。ここは我が家よ。

アキヲ 私の我が家だ。それから(あきに)おまえの我が家だ。おまえ！

あき 何です？

アキヲ 息子はどうしたんだ？ さっきから、どうも足りないものがあると思っていたんだ。息子が足りなかったんだ。息子はどこだね。追い出したのか？ 売り払ったのか？ それとも床下に埋めたのか？

あきとあきをはじっとアキヲを見ている。

あき 息子がいたことは思い出したんですね？

アキヲ 私の息子だ。

あき 私たちの、だわ。私たちの息子の顔を、あんた、忘れたのね。
あきを お帰りなさい。

間。

アキヲ 息子、かね？

間。

あきを 夕飯は、もうすみましたか？

アキヲ 息子なんだね？

間。

あき 魚、食べます？

アキヲ あっ……ああ、魚だね。(食べる)

あき どう？

アキヲ えっ？ 何が？

あき メ鯖よ。

アキヲ それで？

あき ……

間。

あき すぐに秋になるわね。

アキヲ 私がいたところは年中雨気でね、高温多湿という奴でね。ムシムシジメジメ、カビばか

りだ。マラリヤ蚊が多くてね。さいわい私はストリキニーネを手に入れてね。(あきをに)

おまえ、人間何事も要領だよ。

あき ご飯は、もういいのね。片づけますよ。

あきを 僕は宿題です。

あきは茶袱台を持って去り、あきをは本を抱えて去る。アキヲ、二人のあとにウロウロ
とついてゆく。

5 雪まろげ

箱を持った女四（ふゆ）と、その娘（あるこ）が出てくる。

箱は、「両手で捧げ持ち得るほどの大きさの、ほぼ立方体の木の箱で、白布で被われて」
いる。それからまた、箱は荒縄で十文字にしばられてもいる。

家に着くと、ふゆは、茶袱台の上に「箱」を投げ出す。

あるこ つまり、こうやって帰ってきた、というわけね。

ふゆ これはあなたの許へ帰っておいでになった「英霊」なのですよ、とおごそかに告げられて、
ありがたく受け取って仏壇にしまっておくんだわ。

あるこ 「名誉の戦死」って、こんなちっぽけな箱の中に入れてしまう程度のものなのね。

ふゆ おまけに小指の先でぶら下げることができるといって、軽いわ。

あるこ ねえ。

ふゆ 何？

あるこ 私、中身を見たい。

ふゆ およし。ただの灰が入ってるだけさ。

あるこ そうかしら？

ふゆ そうさ。それも、あの人のお骨かどうか、わかりやあしない。

あるこ そうかしら？

ふゆ 三丁目の風呂屋に、相撲取りみたいに大きい息子がいただろう。

あるこ ええ。

ふゆ その息子が、名誉の戦死になって帰ってきてさ、嫁さんが気違いになって英霊の箱をあけてみたら、砂のようなものがほんのぽちり入っていて、それは、骨を焼いた灰のようでもあり、そうでないようでもあり……。

あるこ つまり、遺骨どころか、ただの砂だったかも知れない、というわけね。

ふゆ そんなものさ。見ない方がいい。

あるこ でも、私、名誉の戦死を見たいのよ。それに……、

ふゆ 何？

あるこ 英霊が荒縄でぐるぐるまきにされているのも気になるわ。

ふゆ ……

あるこ 何が入っているのかしら？

ふゆ ……灰さ……。

あるこ 見たくない？ 母さん？

ふゆ ……今さら……。

あるこ 私、見たいわ。

ふゆ ……眼が腐るよ……。

あるこ 何が入っているのかしら？

ふゆ ……

あるこ 見たくない？ 母さん？

ふゆ ……

あるこ 私、見たいわ。

ふゆ ……

ふゆは無言でへ箱を弄んでいる。

あるこ 何が入っているのかしら？

ふゆ うるさい子だね。

あるこ 見たくない？ 母さん？

ふゆ くだいねえ。

あるこ 私、見たいわ。

ふゆ 勝手に見ればいいだろう！

叫んでへ箱を投げつける。

あるこ
…：勝手に見るわ。

へ箱の縄をほどこうとする。

ふゆ、凝視している。

あるこ、縄をほどいて行く。

ふゆ、凝視している。

あるこ、縄をほどき終わる。

ふゆ、凝視している。

あるこ
(蓋に手をかけ)開けるわよ、母さん。

開けかかるのと同時に、二人のうしろに現れる男四(フユヲ)。

フユヲ
今晚わ。

あるこ、手をとめる。

ふゆ、静止する。

フユヲ ちよっとお訊きしたいのですがね。

ふゆとあるこ、ギクシヤクとして振り返る。

フユヲ (怯えたように) 私は……フユヲという名前だったような気がするのですがね……でもって、ふゆ、という名前の妻と、あるこ、という名前の娘を持っていた、というような気もするのですよ。それでお尋ねしたいのですが、私はもしかするとフユヲではないでしょうか？

ふゆ (無言)

あるこ (無言)

フユヲ ……失礼しました……。

出て行こうとする。不意に、

ふゆ お帰りなさい。

フユヲ 何といいました？

ふゆ お帰りなさい。

フユヲ ……ということは、私はフユヲなんだ。

ふゆ お帰りなさい、あんた。

フユヲ ただいま、おまえ。

ふゆ ここはあんたの家ですよ。

フユヲ どうもそうらしい。

ふゆ 忘れちゃったんですか？

フユヲ 覚えていることもあるんだがね。いろいろんなことが、どうももうひとつ、ハッキリしない。

フユヲ、灰皿を指し。

フユヲ これは何だったかね？

あるこ 湯呑み茶碗よ。

フユヲ 何をするものだね？

あるこ お茶を飲むんだわ。

フユヲ お茶？

あるこ 飲んでみる？ 父さん。

フユヲ 父さん？

あるこ 父さんはお茶を飲んだわ。父さんはあんたよ。

フユヲ 私かね？

あるこ 私は、あるこよ。

フユヲ 覚えているよ。あるこ、というのは娘だ。

あるこ お茶を飲む？ 父さん？

フユヲ そうだね。

フユヲは、灰皿に注がれたお茶を飲む。

フユヲ お茶だね？

あるこ そうよ。おいしい？

フユヲ 何というか、複雑な味がするよ。……（ふゆに）小便をしたいのだが、あれはどこだね？

ふゆ ハバカリですか？

フユヲ ハバカリ、といったかね？ そんな気もする。

ふゆ 廊下の突き当たりですよ。

あるこ つれて行ってあげるわ。

三人、出てゆく。

6 空家

暗黒の中に提灯が八つ、浮く。

その朧な光に誘われるようにして、夫探しの女（ないこ）が空の鳥籠を手に見れる。提灯を持っているのは黒布で眼かくしをした八人の影夫（カゲヲ）たちである。と、うずくまっていたあるこが、怯えたように。

あるこ 誰？

ないこ 私。

あるこ お化け。

ないこ いいえ、人。人の女。

あるこ 嘘つき。

ないこ なぜ？

あるこ ひとだまが八つ、ふらふらよろよろ、闇夜なのに、明るいわ。

ないこ 私

あるこ 何？

ないこ　ひとだまなんて見えないわ。

あるこ　何しにきたの？

ないこ　引っ越し。

あるこ　ここに？

ないこ　そう、この長屋に。突き当たりに空家が一軒ある。そこに住んでいます。

あるこ　一人で？

ないこ　えっ？

あるこ　それとも、ひとだまも一緒？

ないこ　一人で住んでいます。

あるこ　ここはふつうの、ただの、当たり前の長屋だわ。

ないこ　私も、ふつうの、ただの、当たり前の女です。あんた、

あるこ　えっ？

ないこ　眼医者を探した方がよくてよ。

あるこ　そうかしら？

あるこ、不意に口笛を吹く。
と、あきさが現れる。

あきを お化けだ。

あるこ 人、ですって？

あきを だけど、ひとだまが八つ。

ないこ 見えないわ、そんなもん。

あきを ぼくには、見える。

あるこ 私にも、見える。

ないこ 私、この長屋に住むんだわ。一人でね。それから、

あるこ それから？

ないこ 夫探しをするんです。

あるこ 夫探し？

ないこ 私の夫は、この長屋に住んでいる誰か……男……。

あるこ きちがい。

ないこ (不意に、あきを見) あなたは私の夫ですか？

あるこ お合い憎さま。この人は、私の夫になるんだわ。

ないこ (あきをに) あなたは、私の夫だったこと、ありませんか？

あるこ 来月には祝言なんだわ。この人は、きちがいの夫じゃない。お化けの夫だったことなん

かない。

ないこ そうかしら？

あるこ この長屋には、あまってる男なんていない。

ないこ そうかしら？

あるこ ……

ないこ 誰かが嘘をついている……。

あるこ そうかしら？

ないこ 男たちがみんな、口でいっているとおりの男だなんて、どうしてわかるの？

あるこ あんた、誰？

ないこ 私、ないこ。誰でもないこ、名無しのないこ。それで、あんたは？

あるこ 私、あるこ。

ないこ ないことあるこ。だったら、私とあんたは、同じひとりの女だわ。

あるこ やめて！

叫ぶと、闇。

7 起き上がり小法師

四組の夫婦（はるとハルヲ、なつとナツヲ、あきとアキヲ、ふゆとフユヲ）、それにあきの息子のあきを、ふゆの娘のあるこ、雪、月、花の少女娼婦たちと特攻帰り、そして、ないこの十五人が正座して、自分の名前を記した位牌を手にはしている。

戸籍係一と二が、戸籍簿を手に洲崎長屋の住人たちの間を歩きまわり、

戸籍係一 自分だね。

住人たち 自分です。

戸籍係一 間違いなく自分だね。

住人たち 間違いなく自分です。昭和二十年八月三十日洲崎長屋の住人の自分です。

戸籍係一 名前は？

はる はる。

なつ なつ。

あき あき。

ふゆ ふゆ。

戸籍係二 名前ですが……。

はる はる。

なつ なつ。

あき あき

ふゆ ふゆ。

戸籍係一 わかりやすく結構だ。名前は？

ハルヲ ハルヲ。

ナツヲ ナツヲ。

アキヲ アキヲ。

フユヲ フユヲ。

戸籍係一 つまり「ヲ」だね？

四人 「ヲ」です。

戸籍係一 名前は？

雪 名前なんだわ。

月 名前なのよ。

花 名前ですって。

けたたましく笑う。

戸籍係一 白痴かね？

特攻帰り 娼婦です。

戸籍係一 白痴の娼婦かね？

はる 長屋の恥よ。

なつ 恥知らずだわ。

あき 恥ずかしいと思ったら、ありやしない。

戸籍係一 長屋の恥で恥知らずで、恥ずかしいと思ったらありやしない、の、白痴の娼婦でも名前く

らいはあるだろう？ 名前がないと困るんだよ。

雪 私、困らない。

月 あんた、困るの？

花 誰が、困るの？

戸籍係一 国家が困るんです。名前がなくては戸籍ができない。戸籍がなければ、人間じゃない。

名前は？

特攻帰り 雪月花ですよ。ゆき、に、つき、に、はな、です。

戸籍係一 狸に狐に鳥でも一向にかまわないんだ。名前がありさえすれば、ね。名前は？

特攻帰り ヒ・モですよ。ヒ・モ。

戸籍係一 そっちは？

あきを あきをです。

戸籍係二 さっきもいた。

アキヲ アキヲです。

戸籍係一 よくある名前だ。

あきを 父さんは、カタカナです。僕はひら仮名だ。

戸籍係一 父がアキヲで、息子はあきをか？ 自分があやふやにならないかね？

あきを なるはずがありません。

戸籍係一 なぜ？

あきを 母さんがどっちを呼んでるか、僕にはすぐわかる。

あき あきをさん……。

あきを ハイ！

戸籍係一 なるほど。

あき アキヲさん。

間。

あき アキヲさん。

間。

あき アキヲさん。

間。

戸籍係一 (アキヲに) ひよっとすると、あんたの方じゃないかね？

アキヲ ヘッ？

あき アキヲさん。

アキヲ ……私かね？

戸籍係一 あんた、本当に自分かね？

アキヲ 自分ですよ。正真正銘の私です。

戸籍係一 だったら、どうしてすぐに返事をしないんだ？ あんた、アキヲさんなんだから？

アキヲ そりゃあそうですね、あまり、アキヲさんなぞと呼ばれたことがないもんですから。

……これから気をつけます。

戸籍係一 そっちは？

あるこ あるこ。

戸籍係一 そっちは？

ないこ ないこ。

戸籍係一 あるこにないこ、か。姉妹かね。

あるこ 他人だわ。

ないこ どうしてそんなことがわかるの？ ないことあるこ、誰でもないこと誰でもあるこ、同

じょうなものだわ。

あるこ やめてよ。私はあんなにかじやない。私は自分一人のあるこよ。親のあるこで家のあるこ。ないない尽くしのあんなじやないわ。

ないこ そうかしら。

戸籍係一 これで全部だね。

ないこ いいえ。

戸籍係一 まだ、誰かいるのかね？

ふゆ いませんよ。

ないこ いるわ。

なつ いないわ。

ないこ いいえ、いる。隠れている誰か。隠れていた誰か。隠している誰か。隠されている誰か。あき いないといったはずよ。

ふゆ そう、いない。新参者に何がわかるの？

なつ きのう引っ越してきたばかりで、何もわかつちやいないんだ。

ないこ でも、いるわ。

あき なぜ？

ないこ 匂いがするわ。

ふゆ まるで犬だね。

ないこ 男が一人、いるわ。

なつ どんな顔の男？

ないこ わからない。

あき 年は？ 名前は？

ないこ わからない。でも、いる。

ふゆ どこに？

ないこ 畳の下。

戸籍係一 死人か。そいつは、係が違うよ。私らは生きてる者の戸籍係でね。死人の戸籍は隣の

男が担当している。苦情はそいつにいつてくれ。

なつ 百年も前から、

あき この長屋はあったんだもの。

ふゆ 死人の一人や二人、

なつ 床下に埋まってたところで、

あき 何の不思議もないわ。

ふゆ 余分の死人を気にする前に、

なつ 自分が生きてるか死んでるか、

あき 確かめた方がいいよ。

戸籍係一 そういうことだ。

出てゆく。

立ち上がる女たち。

なつ あんた、引っ越し先を間違えたんだよ。

あき あんたが住むのは、この長屋じゃなくて、

ふゆ 半分焼けて休業中の、あっちの店だ。

ないこ あっちの店？

なつ 女郎屋だよ。

なつ、あき、ふゆの三人は、はるをかばって出て行く。

あき 風呂の匂いがするよ。

ふゆ 早く行かないと、お湯が汚くなる。

なつ 誰も彼も入るんだもの。

雪 私たち、シャワーよ。

月 銭湯なんて冗談じゃない。

花 お湯も石鹸も使い放題なんだわ。

雪、月、花、出て行く。

ないこ あんたも行くの？

あるこ どこへ？

ないこ 銭湯。ほかほかと、一面に湯煙をあげている、銭湯。脂と垢で茶色に濁って、藻のよう

なものが漂っている、お風呂。

あるこ 行くわ。行って、女たちにまじるわ。

ないこ そうやってあんた、誰でもなくなってしまうんだわ。

あるこ あんたは行かないの？

ないこ 行くわ。行って、女たちにまじるわ。そうやって私、誰でもなくなるのよ。

あることないこ、出てゆき、男たちだけがとりのこされる。

8 川

水の音がする。

背景は川つぶちに変わり、ハルヲ、ナツヲ、アキヲ、フユヲの四人が溜め息をつくど、島崎藤村の「千曲川旅情の歌」をもじって、

ハルヲ 配給のお米は見え、歌哀し政府のかけ声。

ナツヲ メチル酒濁れる飲み、限りある我が身ためしぬ。

アキヲ 昨日またかくしてありけり、今日もまたかくしてありなむ。

フユヲ この命何をあくせく、食をのみ思ひわずらふ。

四人、また長々しい溜め息をつき、

ハルヲ こんなはずじゃなかったんですがね。

ナツヲ そう、確かに、こんなはずじゃなかった。

と、特攻帰りが口を挟み、

特攻帰り　どんなはずなら、よかったんです？

アキヲ　待たれているはずだったんだ。

あきを　待ってましたよ、僕も母さんも。

フユヲ　そうかね？　本当に私を待っていたのかね。

あきを　待っていました。長屋の女たちはみんな長屋の男たちを待っていたんです。

ハルヲ　それだよ。

ナツヲ　そう、それだ。

特攻帰り　いったい、なんです。

アキヲ　つまり、だ。女たちが待っていたことはわかるんだよ。

ハルヲ　だが、どうもね、どうも私は待たれていた、という実感がわかないんだよ。

アキヲ　つまりだ、あいつらは何というか、とりとめもなく待っていたんじゃないか、という気が

がするんだよ。(ナツヲに) あんた、どうです？

ナツヲ　みんな少しずつ病んでいるんじゃないんですかね。誰も彼も、ね。

ハルヲ　私もかね？

ナツヲ　あんたもです。

アキヲ 私も？

ナツヲ あんたも、だ。

特攻帰り そういうあんたはどうなんだ？

ナツヲ 私、医者でしてね。

アキヲ だから？

ナツヲ 医者としての私は、病気を敵にまわしてますがね、病気という奴に個人的な恨みつらみがあるわけじゃない。従って、病気の個人的な敵じゃないが、味方でもない。病気というものは何としても治療しなきゃならんもんで、できれば除き去るべきだ。もし除き去るべきことができなければ、おさえつける。おさえつけることができなければ防止する、というふうにして、とにかく、どんなことがあっても、助長しちゃあならん。

ハルヲ (苛々して) あんたは、病気なんですか、それとも……

ナツヲ (いいかけるのをさえぎり) 私は、病気ですよ。そう診断しています。だが、診断とはただたんに、あるものの存在を認めて、それを適当な名で呼ぶことにすぎない。たとえば、(と、いきなりフユヲに) あんたは記憶喪失症だ。私は、あんたをそう診断する。ところで、

アキヲ 何です？

ナツヲ 正直なところを白状しますがね。診断のあとにくるものの方が、私にはわからない。特攻帰り 診断のあとにくるものたあ、何です？

ナツヲ 治療ですよ。私は、（と、フユヲを指し）記憶喪失症と診断できても、どんな治療をしたらいいか、皆目わからない。

フユヲ わからないんですか？

ナツヲ わかりません。

フユヲ まったく？

ナツヲ 全然。……時には別な医者呼んで相談することもあるが、悪くいくと、相談できる医者がいないことさえある。

フユヲ 頼り甲斐のない話だ。

ナツヲ それからまた、ある時には、治療法に間違いはないのだが、それが必ず効くとは限らない、ということもある。

フユヲ なぜ？

ナツヲ 個人差があるからさ。もちろん。

フユヲ 情けない話だ。

ナツヲ それから非常に稀なケースだが、治療法が何も無いこともある。

フユヲ いい加減にしてくれ。

ハルヲ あんたの話を訊いてるだけで、病気になるそうさ。

ナツヲ あんたは、立派な病人だ。もうすでに、病気で。

ハルヲ いい加減なことを言わんでくれ。

ナツヲ 疑心暗鬼という病気です。あんたは疑ってる。あんたの女房が、あんたを待っていたのかどうか。……それから（と、アキヲを見）あんたは、思い出病だ。

アキヲ 思い出病？

ナツヲ 別名、記憶過多症。

特攻帰り 何です？ そりゃあ？

ナツヲ 記憶にとらわれて盲になる病気です。

あきを それじゃあ、僕は？

ナツヲ いい子病でしょう。あんたは、母親の前に出ると自動的にいい子を演じてしまうんだ。

リッパな病気ですよ、それは。

特攻帰り 私はどうです？ 三人の女をあやつってヒーホヒーホの健康な私は？

ナツヲ 忘れ病ですな。あんたは、コロコロと変節して、まるでプライドというものが無い。実に病気だ。

フユヲ そういうあんたは、どうなんだ？

ナツヲ 嘘つき病ですよ。

ハルヲ 記憶喪失症に、

アキヲ 記憶過多症。

フユヲ 疑心暗鬼に、

特攻帰り 物忘れ。

あきを いい子になりたがる病気に嘘つき病か。

ナツヲ 原因はわかっているのですがね？

フユヲ 原因？

ナツヲ 誰も彼も、自分が誰なんだか、わからなくなってるんですよ。

特攻帰り けっこうじゃないか！ 俺は誰でもない。娼婦の一がやさしい男を欲しがっていれば

俺はやさしい男になる。娼婦の二が冷たい男を欲しがっていれば、冷たくなるし、娼婦の三が強い男を欲しがっていれば、強くなる。けっこう飽かずに毎日がすぎて行く。

フユヲ 俺は嫌だ。

ハルヲ 私も真っ平だ。

フユヲ 俺は何とかして俺になりたい。ズタボロの袋みたいな頭の中から、どんどん憶がこぼれて行っちゃまうような俺はいやだ。

ハルヲ 私はね。当たり前で普通でありきたりの私が欲しいんですよ。それから、どこにでもいる、平均的な、ただの女房が欲しいんだ。平凡で平和で波風の立たない暮らしが欲しいんだ。

アキヲ 私はね、私は、元通りの私になりたいんですよ。私は、夫で、私は、父親で、私は、一家の主だ。そう名乗れるだけの私が必要なんです。

あきを 僕は、違いますよ。母親思いの息子と、父親嫌いの少年と、それから隣の娘と駆け落ちを企んでいる男を全部僕にしたい。

ナツヲ 私は臆病な嘘つきですからね、ようやく手に入れた他人を精いっぱい、自分にしたいと思ってますよ。

と、不意に現れる戸籍係一と二。

戸籍係一 自分かね？

ハルヲ、ナツヲ、アキヲ、フユヲ、特攻帰り、あきを、直立不動の姿勢になり、

六人 自分です。

戸籍係一 間違いなく、自分だね？

六人 自分です。間違いなく自分です。昭和二十年九月七日の自分です。昭和二十年九月七日、午後九時十三分の自分です。昭和二十年九月七日、午後九時十三分、洲崎長屋の住人の自分です。

暗
転。
。

夫探しに来た女ないこを半円形にとり巻いて座っている黒い着物の女たち、はる、なつ、あき、ふゆ、あるこ、雪、月、花。

はる いないわ、

なつ いないわ、ここには、

あき いないわ、ここには、いないのよ、

ふゆ いないわ、ここには、いないのよ、余分な男なんて、

雪 いないわ、ここには、いないのよ、余分な男なんて、

月 いないわ、ここには、いないのよ、余分な男なんて、一人も、

花 いないわ、ここには、いないのよ、余分な男なんて、一人も、いないのよ。

あるこ 出て行って。

ないこ 何をいわれているのか、わからない。何かをいっている声は聞こえてくるのだけれど、

意味がわからない。辛いわ。

あるこ 何が？

ないこ 言葉の壁にふさがれて、心を開けて見せたくても、その相手のいないのが、いちばん辛

い。

はる 出て行って、

なつ 出て行って、といったのよ、

あき 出て行って、といったのよ、ここから出て行って、

ふゆ 出て行って、といったのよ、ここから出て行って、この長屋から、

ないこ なぜ？

はる うるさいからよ、

なつ うるさいからよ、それに不安になるからよ、

あき うるさいからよ、それに不安になるからよ、それからあんたは、

ふゆ うるさいからよ、それに不安になるからよ、それからあんたは余分だからよ。

ないこ 私……、

あるこ 何？

ないこ 私、能うことなら、のんびりと、ほわっとした暮らしがしたいわ。少しばかり私が怠け

たところで、すべてこの世はこともなく、少しばかり私が、励んだところで、非力な私に、

なにほどのことができるわけでもないのだもの。でも、

はる・なつ・あき・ふゆ 何？

ないこ ひとりでは寂しいわ。怠けるのも、励むのも、ひとりでは、寂しい。

はる だから、ここで？

ないこ ええ、ここで。

なつ だから、ここで、誰かと？

ないこ ええ、ここで、誰かと。

あき だから、ここで、誰かと、怠けたいのね。

ないこ ええ、だから、ここで、誰かと、怠けたいのよ。

ふゆ だから、ここで、誰かと、怠けたいのね、励みたいのね。

ないこ ええ、だから、ここで、誰かと、怠けたいのよ、励みたいのよ。

はる なぜ、ここなの？

なつ なぜ、ここでなくちゃいけないの？

ないこ 花が咲く。

あき 花、ですって？

ふゆ 何の花？ 何の花が咲くの？

ないこ 花が咲いているのを見たわ。気がつかなかった？ あんたたち？

はる いつ？

ないこ 花の季節。

なつ どこに？

ないこ 野原。

あき どのくらい？

ないこ 枯れるまで。

あるこ 馬鹿みたい。花の季節になれば花は咲くわ。野原があるのは、ここだけじゃないわ。花

は枯れるまで咲くものよ。

ないこ 見てごらん。

あるこ 何を？

ないこ あんたの母さんの、顔。母さんたちの顔。

あるこ、ふゆを見る。それから、はる、なつ、あきを見る。

ないこ 面伏せの気配がある。

あるこ なぜ？（ふゆに）母さん？

ふゆ うるさい子だね。

あるこ （はるに）なぜ？

はる 黙っておいで。

あるこ （なつに）なぜ？

なつ 静かにおし。

あるこ (あきに)なぜ？

あき あんたは、子供なんだから。

あるこ (ないこに)なぜ？

ないこ 私を知っているからよ。

はる 知っている。

なつ そう、あんたを。

あき あんたと瓜二つの女を。

ふゆ あんた、誰？

ないこ 私よ。

はる あんたは、死んだわ。

ないこ いつ？

なつ 花の季節。

ないこ どこで？

あき 自分の部屋で。

ふゆ まるでぽっくりと、死んだわ。

ないこ 洲崎の遊廓の、娼婦の部屋だったわ。その部屋からは花野が見えた。死んだ女は、花冷

えの一夜をすごして柩に納めるときも、まだほんのりとあったかかった。花の誉のぷっくり
ふくれた枝にふれながら、お棺は運び出されて行ったわ。

はる そうよ、あんたは、あの女だわ。安香水で私たちが死んだ体を拭いた女よ。

なつ 死んでいるというのに、あんたの体はふっくりと肉づいて、いたわ。

あき 両足の間の、まるで盛んな柔毛の鬃りにいろどられて、

ふゆ 下腹はいつそう白く、眩しかったわ。いやだ、と、私、思ったわ。

あるこ 誰の話をしているの？

ないこ 死んだ女の話よ。女は娼婦だったわ。それから、

あるこ それから？

ないこ それから、何をしたの？

はる 死んだ女の針箱には、針山があった。

なつ まち針、絹針、木綿針が、すぐにも使えるようにさしてあった。

あるこ それから？

ないこ それから、何をしたの？

あき 私たち、針を取ったわ。針の目に糸を通した。

ふゆ そして縫ったわ。ぷつぷつと縫ったわ。

はる 肉を縫ったわ。成仏するように、縫い閉じたわ。

ないこ 花をね。

なつ ええ、花を縫ったわ。

ないこ 花弁をね。

あき ええ、花弁を縫い閉じたわ。

ふゆ そうやって、送ったのよ。花野へかえるおんなのいのちを、

ないこ 縫ってしまったのよ。息、できないようにしたのよ。あんたたちは喪服を着て、死んだ

女の両足の間を縫った。

はる あんた、誰なの？

ないこ 私よ。

なつ あんたは、死んだわ。

ないこ 母さんよ。

あるこ あんたの？

ないこ 私の母さん。(はる、なつ、あき、ふゆに) あんたたちは、子守唄に聞かされた。娼婦の

部屋に出かけてゆく父さんたちの話を。あんたたちの母さんはいった。娼婦の体の中には螢

がいて、それが男を迷わせるんだよ。娼婦が死んだら、体を縫い閉じるんだよ。そうすりゃ、

螢はもう光らないからね。いいかい、螢を逃がしちゃ、いけないよ。螢は肉を喰うからね。

あれは、悪い生きものだよ。

はる 仕返し？

なつ 仕返しにきたの？

あき 仕返しにきたの、ここへ？

ふゆ 仕返しにきたの、ここへ？ そうなの？

ないこ 夫を探しにきたんだわ。

はる ここには、いないよ、よそを探すんだね。

なつ 女郎の子は、やっぱり女郎で、男探しにきたんだらうけど、お合い憎さま。

あき 女郎屋はきれいさっぱり焼け野原だ。

ふゆ そのおかげで家内安全。男たちの行き場所は我が家だけになったよ。

はる 余分な男をさがして、にせの所帯を持つとしても、無駄さ。

なつ みんなぴったりと足りちまってるからね。

あき この長屋で余分は、ただひとつ、ただひとり。

ふゆ あんただよ。

ないこ そうかしら？ だったら、あれは誰？

女たちの背後に、脱走兵が立っている。

なつ 見えないわ、
あき 見えないわ、何も、
ふゆ 見えないわ、何も、誰も、
はる 見えないわ、何も、誰も、見えな

叫ぶと、闇。

10 余分の図式

四組の夫婦が、赤い紐でひとりあやとりをしている。自分の内側に閉じこもった孤独なあやとりが長く続き、

はる 夏だったかしら？ 思い違いかしら？ いいえ、夏だったわ。薄黄色い電燈の傘に、小さな虫がいったいはりついていたもの。夏が深いんだって、私、思ったもの。そうだわ。夏よ。私、思い出した。頼りない電氣の光の向こうに、五年前の夏の夜がようやくうつすら見えてきた。

はるの独白をズタズタにするような声で、

ハルヲ まったく本当に飯はうまいな。うまくて、うまくて、まったくうまい。おかわり。
はる ……もう、ないわ。

ハルヲ いつもそうだ。食い氣の入口を入った途端に飯がなくなる。

はる あんた。

ハルヲ 何だね。

はる 私、見てたわ。

ハルヲ 何をだね。

はる 五年前の夏。

ハルヲ、いきなりピシヤリと足を打つ。

ハルヲ (忌々しそうに) 蚊だ。

はる 螢よ。

ハルヲ こいつは蚊だ。

はる 五年前の螢。覚えていない？ 忘れた？ 私、覚えているわ。あんたと私、螢をつかまえ

やしなかった？ つかまえたのよ。その螢を、あんた、私の体の中に無理矢理閉じ込めやし

なかった？ 閉じ込めたわ。かわいそうな螢。けなげに光ったわ。私の足の間で、ゆっくり

ピカピカ。私、我慢していたわ。くすぐったくてたまらなかつたけれど、螢、光らせてじっ

としていたわ。あんたは、うっとりとしてそれを見ていた。螢と私を見くらべていた。螢は生き

物で私もそうで、あんた、そういったわ。生き物だから恋したんだと、あんた、いった。私、

待っていたのよ、あんたをね。

ハルヲ お前。

はる 何？

ハルヲ お前は、待つことを楽しんでたんじゃないのかね？

はるとハルヲが口を噤むと、

なつ 時計が鳴っている。遠くで犬の音がする。あんたはグーグー眠っている。私は闇に慣れた目で天井の節穴を数えて、いつまでも溜め息ばかりついている。それからようやく眠る。

ナツヲ 確かに夢なんだ。だが、その夢には中味がない。真っ白けの悪夢なんだ。それが怖くて俺は眼を覚ます。おまえは眠っている。しばらくの間、俺はおまえの寝顔を覗める。おまえは暑苦しそうに眠っている。その寝顔の中に、俺は五年前を探す。見つかるはずもない、五年前を、だ。それで時々、俺は、わからなくなる。お前の寝顔の中に俺の五年前など、あるはずもないのに、おまえはいつの間にか五年前の女房と同じ顔になってしまっている。

なつ 私たち、にせものだわ。にせの夫婦だわ。戦災で家族まるごとききれいさっぱりのおんと、戦死のお知らせでひとりぼっちの私。足りない者同士でできた、うその夫婦。だけでも、あんたはそうすることの方を選んだのじゃなくて？ 百通りの嘘のつき方の中から、今の嘘にしようと思ったのじゃなくて？

ナツヲ わかってはいるんだがね。ただ隙間からね、ヒューヒューと昔の風が吹き込んでくるの
でね。

なつ 今は夏よ。

ナツヲ だから？

なつ 風が吹き込んだって、寒くはないはずよ。

ナツヲ 暑いんだ。尻の下をじりじりと炙られるようなんだ。……おまえ。

なつ 何？

ナツヲ 俺はそのうち、芸当のできる猫になって、踊り出しそうさ。知っているかね？

なつ 何？

ナツヲ 鉄板を火で炙ってね、その上に猫を乗せ、それから三味線をじゃかじゃかと弾く。する

とね、猫は足の裏が熱くってたまらるので踊り出す。毎日毎日それをくり返すとね、そのう
ち、三味線を弾いただけで猫は踊り出す。出来上がり、というわけだ。

なつ あんた。

ナツヲ えっ？

なつ 猫になって踊りながらここを出て行きたいんなら、私、三味線を弾いてあげるわ。……い
つだって、よ。

なつとナツヲが口を噤むと、

あき どこへ行ったのかしら？ あの子？ この頃、夜遊びが多くなったわ。私の眼の前にいる

時も、ふっとどこかへ行ってしまうって、他人の眼をするようになったわ。

アキヲ 腹が減ったんだがね。

あき 午後の三時に夕飯を食べるの？ それでもいいけど、そうすると夕食は抜きよ。夜が長くて寝苦しいわよ。

アキヲ 小腹が減ったという奴だ。何かちょっとしたものは、ないかね。

あき 何もないわ。

アキヲ 豆があるじゃないか。ここに、豆が。

あき それは来月食べるのよ。

アキヲ 来月？

あき ええ、来月の十三日に。

アキヲ 何のまじないだ？

あき えっ？

アキヲ 豆を、半月近くも日干しにして、わざわざまずくして食べるのはいったい、何のまじないだ？ と訊いているんだよ。

あき ……あんた。

アキヲ 何だね？

あき 来月ですよ。

アキヲ 九月の十三日だろ？

あき 九月十三日よ。

アキヲ 来月だろ？

あき 忘れたんですか？

アキヲ 何が？

あき 今月のね、十五日は芋でした。八月十五日は芋だったんです。だから、九月十三日は豆なんだわ。

アキヲ わけのわからんことをいわんでくれ。

あき まだわからないんですか？ 八月十五日は芋で九月十三日は豆よ。

アキヲ ……

あき 月見、です。

アキヲ 月見？

あき 八月十五夜は、団子に薄に芋をそなえて芋名月。九月十三夜は豆をそなえて豆名月。十五夜の月見をしたら十三夜の月見もしなくちゃならない。そう教えてくれたのは、あんたよ。

あんた、四年前のあの日の朝に、そういったじゃない。片月見は不吉だといひ残したから、私、四年この方、芋と豆を忘れなかったわ。芋の月見も豆の月見も、私、恋をそなえていたんだわ。あんた、

アキヲ 何だね？

あき おなか空いているんなら、月見の豆を煮ますか？ どんぶり鉢いっぱい、豆を食べますか？

あきとアキヲが口を噤むと、

ふゆ あんたの体が帰ってくる前に、「名誉の戦死」が帰ってきたわ。荒縄で十文字に縛られた「英霊の箱」のあんた。私、ぐるぐる巻きの理由を今日知ったわ。お国のためにならない死に方をする、お骨は縛られて帰ってくるんですってね。犯罪者として死んだのだから、縄つきで帰されるのが当たり前というわけなんだわ。私、その箱の中味を見たわ。中には、記憶が入っていた。空っぽの体で帰ってきたあんたが、ズタボロの頭からこぼした記憶よ。先に記憶が帰ってきて、あとから体が帰ってきて、記憶と体は、今もバラバラチグハグで、あんたは家の中をホコリのようにウロウロするばかり。ねえ、どうすれば、そんなふうにも彼も失くしてしまえるの？ 覚えていることは何もないの？

間、それから不意に、

フユヲ お多福を、

ふゆ えっ？

フユヲ お多福を、

ふゆ それから？

フユヲ さかさに抱いて寝たならば、

ふゆ それから？

フユヲ あごを踏んだり、おでこを踏んだり、

ふゆ それから？

フユヲ 頬を踏んだり、ヤレヤレ鼻を踏まなんだ。

ふゆ ……それから？

フユヲ ……

ふゆ それで？

フユヲ ……

ふゆ それで？

フユヲ ……よんやさ……。

ふゆ それから？

フユヲ ……：

ふゆ それで？

フユヲ ……よんやさ……。

ふゆ それから？

フユヲ おしまいだ。

ふゆ いったい、どこで覚えて持ってきたんです？ 四年前の記憶はすっかり失くして、そんな、

戯れ歌だけを後生大事に持って帰ってきたのね……。

ふゆとフユヲが口を噤むと、

はる 私、ここにいたわ。

ハルヲ いただけじゃないか。

なつ 待っていたわ。

ナツヲ 待つことに恋してたんだよ。

あき あんたを待っていたわ。

アキヲ 帰ってきたじゃないか。

ふゆ 恋、していたから待っていたのよ。

フユヲ どこへ行ったのかね。

はる・なつ・あき・ふゆ わからないわ。私、何だか、あんたが余分のような気がする。こんな

はずじゃなかったのね。

暗転。

ハルヲ、ナツヲ、アキヲ、フユヲ。特攻帰り、あきを、戸籍係一、戸籍係二の八人の男たちが電信柱のように立っている。その間を、歩きまわる、ないこ。

ないこ 思い出した？

ハルヲ 何をだね？

ないこ 私のことをよ。

ハルヲ 誰だね？

ないこ 私……人を思うその、想いにつられて米をとき、魚を洗う私。

アキヲ お前だね？

ないこ 私。あなたが釣ってきた魚を焼いて、赤紫蘇、青紫蘇の花がやさしく咲きつづけているのをあい交ぜに、新生姜のしよりしよりをつんもりで、あなたのことを想っている私。

フユヲ 思い出したような気がする。

ハルヲ 季節は、秋だね。

ナツヲ 赤紫蘇、青紫蘇の花をあい交ぜに、

アキヲ 新生姜のしよりしよりをつんもりだね。

フユヲ 思い出したような気がするよ。

ハルヲ 間もなくの秋だね。

ないこ 間もなくの秋だね。

ナツヲ それから、お前だね？

ないこ それから私よ。旬の魚を料理して、春、夏、秋、冬、あなたを想って季節に手足を添わ

せてゆく私だね。

フユヲ そう、そんな時があったよ、おまえ。

ないこ 思い出した？

特攻帰り 何を？

ないこ 私のことをよ。

あきを 誰ですか？

ないこ 私。いい匂いのする生き物。

戸籍係一 お前だね。

ないこ 泣いたり笑ったりの玩具だね。あなたをひとまわり小さくした私よ。

戸籍係二 思い出したような気がする。

ないこ あなたたちの忘れ物の私。

ハルヲ そんなことがあったような気がする。

ないこ あなたは私の夫だったのかしら？

ナツヲ 私がかね？

ないこ あなたは私の夫だったことがありますか？

アキヲ 私がかね？

ないこ あなたは私の夫でした。

フユヲ 私がかね？

ないこ 私、歩いていたらわ。ただブラブラと歩いてた。違う、そうじゃない。頭の中が煙たくなって、だから、冷たい川の風に吹かれてひやそうとして、足は水の匂いのする方へ向いていたんだ。水が欲しかったんだわ。私、家にいる時は、水を張った桶に首をつっ込んだまましばらく息をつめたり、でなければ目鼻もとれてしまうほどにゴシゴシ顔を洗ったりしてたんだ。

特攻帰り いったい、何のために？

ないこ いったでしょう。頭の中が煙たくなったからよ。モヤモヤして、そのうちに私がぎっしり詰まっているような気がしてきた。私の体に私が百千万もつまって、それがみんな私なのよ。夏の終わりで、川っぷちで、水で、それから夜。するとふいに、水に映った。

あきを 誰が？

ないこ あんただだわ。あんただだ。あんたはいった。

戸籍係一 何を？

ないこ 私だ、と。

ハルヲ 私が？

ナツヲ 私が私だ、と、

アキヲ 私が私だ、といったのかね？

フユヲ 私が私だ、といったのかね？ おまえに。

ないこ まるで鸚鵡みない。少しずつ言葉の数をふやして、そのぶん馬鹿になっていく鸚鵡だわ。

たった一言で答えることができるのに。

戸籍係二 何を、

特攻帰り 何を、どういふに、

あきを 何を、どういふに答えればいいんだ？

戸籍係一 何を、どういふに答えればいいんだ？ あんた？

ないこ ひいふうみいよおいつおうななや。鸚鵡ばかり八羽もいて、私の鳥籠はからっぽだわ。

私、人真似鳥なんて欲しくはない。私がかまえないのは、あんただわ。私だ、といった、

あんただわ。あんたは私に教えてくれたわ。

男たち 何を？

ないこ 世の中には、二種類の女がいるんだって。

男たち　　どんな？

ないこ　　女と娼婦よ。それから、あんたはいったわ。

男たち　　何を？

ないこ　　忘れたの？

男たち　　何を？

ないこ　　忘れたのね？

男たち、口を噤む。と、現れる、はる、なつ、あき、ふゆ、そして、あるこ。

はる　　忘れたんじゃないわ。

なつ　　はじめから覚えていなかったのよ。

あき　　もともとなかった記憶を拾ってくるなんてこと、できやしない。

ふゆ　　わかったでしょう？　ここには、余分なんていないのよ。

はる　　あんたは、不意にやってきて、それきり居ついて、いつの間にか……。

いい淀む。それをさえぎるように、

ないこ 不意にやってきて、それきり居ついて、いつの間にかどうしたの？

はる 不意にやってきて、それきり居ついて、いつの間にか私の不足を埋め合わせた男がいたわ。

ないこ 余分な男だわ。

はる 私、恋をしていたわ。

ないこ 仮寝の宿よ。あんたはままごとをしていただけ。

はる ままごとなんて、一生できるもんじゃない。いつか夕方になって、母親が呼びにくるわ。

でなけりゃ、豆腐屋がラツパを吹いて通って、おながが空いていることに気づいてしまうのよ。

ないこ あんたは、できたはずよ。

はる 何が？

ないこ ままごとあそびの母親と娘を同時に演じてしまうことがね。見てごらん。

あるこ 何？

ないこ 男たちは疑いはじめている。

なつ 何を？

ないこ 自分は誰？

男たちは、自分の体の一部分が他人になってしまったように、痙攣しはじめる。

ハルヲ (自分の体に) やめろ。俺は手なぞ動かしたくない。

はる やめて。(近よる)

ナツヲ 俺は俺なんだ。体全部、俺なんだ。

なつ 踊らないで頂戴。(近よる)

アキヲ 誰かがいる。俺の体の中に誰かがいる。

あき いないわ。いるわけがないのよ。(近よる)

フユヲ 俺が痛い。喰われて痛い。

ふゆ どうしたというの?(近よる)

はる あんたは、あんたよ。

なつ 私の夫よ。

あき 子供たちの父親で、

ふゆ 一家の主よ。

ないこ 本当に? 本当にそうなの?

はる あんたには痣があったわ。

なつ あんたには手術の痕があった。

あき あんたには黒子があったわ。

ふゆ あんたには怪我の痕があった。

女たち、男たちの上半身を裸にして行く。

はる・なつ・あき・ふゆ あったわ。あんたよ。

ないこ そうかしら？

あるこ なぜ？

ないこ 見てごらん。よく見るのよ。

あるこ (あきをの裸の肩を見) ……父さんだわ。父さんの怪我のあとがある。

ないこ あの男にはあんたの夫の痣がある。(と、特攻帰りをさす) あの男には、あんたの夫の

手術の痕(戸籍係一を指す) あの男にはあんたの夫の黒子がある。

はる 信じない。

なつ そう信じないわ。

あき 出て行って。

ふゆ ここから出て行って。

はる 私たちは、これでいいのだから。

なつ これで満足しているのだから。

あき ここには私たちに見合った恋があるのだから。

ふゆ そうやって私たちはつづいてゆくのだから。

ないこ にせものだわ。

ここにあるのは、にせものだけよ。あんたたちは夫と名づけた男たちとの出来事を忘れまいとして思い出をくり返しているだけ。男たちの留守に幻と戯れていただけ。そして帰ってきた生き身の男たちと、どう恋したらいいかわからなくて、とまどっているだけ。恋は、すたれることも、飽きられることも、忘れられることもなくて、ここにあるだけ。

ふゆ あんたは誰？

ないこ 私、恋。

男たちの痙攣が激しくなる。

ないこ 私は、あんたたちの恋。

はる どこへ誘うの？

ないこ この世の果て。そこで、私たちは霊も肉もまるごと裸になる。私たちは朝、野の草を取って洗い、男たちは夜に、魚を取る。月が出れば笛を吹き、私たちは乳房に月光を浴びる。花をしぼって、紅をさし、私たちは誰もがみな一人の女になってゆく。

あるこ 一人のあんたになるというの？

ないこ 恋になるのよ。それからまた別の恋に。すべてはどこからかやってきて、私たちを連れてゆく。……見つけるのよ。

はる 何を？

ないこ 恋を。恋は、探されるために埋もれているのだから。男たちは一人の男になり、女たちは一人の女になり、言葉を忘れる。探すのよ。見つけるのよ。私が埋めた、恋の種子をね。さあ、見せてあげる。眼を覚すのよ。出てきて。

叫ぶと床下から、一人の男が踊り出てくる。脱走兵である。なだれこんでくる音楽。

脱走兵は胞子をまきちらして、踊り、次第に男たち、女たちを共感呪術的な催眠舞踏に引き込んでゆく。

そして、夏の夜の狂騒の中で、男たちは一人のへ俺へに女たちは一人のへ私へになってゆくのである。

エピソード

茶袱台を取り巻いて、全員が箸と茶碗を持ち、食事している。

ないこ 洲崎長屋の九月十日。ここにやってきた私が何を望んでいたのか、私は知りません。どんな他人が私を待っていたのか、私は知りません。ここにいる私、この私自身も他人なのかどうか、私は知りません。

食事の物音。そして、

はる おいしい？ あんた？
戸籍係一 うまいよ、おまえ。
なつ おいしい？ あんた？
あきを うまいよ、おまえ。
あき おいしい？ あんた？
特攻帰り うまいよ、おまえ。
ふゆ おいしい？ あんた？

戸籍係二 うまいよ、おまえ。

雪 おいしい？ あんた？

脱走兵 うまいよ、おまえ。

月 おいしい？ あんた？

フユヲ うまいよ、おまえ。

花 おいしい？ あんた？

アキヲ うまいよ、おまえ。

あるこ おいしい？ あんた？

ハルヲ うまいよ、おまえ。

ないこ おいしい？ あんた？

ナツヲ うまいよ、おまえ。

問い、答え返す声が次第に入り乱れてゆき、ふっとやむと、また食事の物音。そして女たちは、呟く。

はる 野の芹を、
なつ 豆腐の上に、

あき ふりかけて、
ふゆ あなたのことを、
ないこ 思っています。

女たち笑み、次第に笑いが拡がってゆく。

底本

『恋三部作』

而立書房

一九九二年二月二十五日 第一刷発行